

「勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。」ヨハ 16:33

私たちは、第一の門である洗礼から始まり、第二の門である聖餐式を通して、再生への路を歩んでゆきます。しかし、経験上日々の生活の中で勝利を続けることは簡単ではありません。ちょっとした不公平や人の悪意に無関係の人を巻き込んでしまう。自分のものでない文房具を、ほんの少しだけと思って、自分のために使ってしまう。公の仕事に無意識に自分の好みを入れて、押し通してしまう。ほんの小さな過ちや、大きな隠れた過ちに、主への負い目が増えて行きます。御言葉に完全に従うことは難しく、負けは続き、再生は遠いと思う時があります。しかし、主はおっしゃいました、「私はすでに世に勝った」と。

主は何に、そして、いかに勝利されたのでしょうか、そして私たちは、どうすれば勝利できるのでしょうか。

「貧しさに負けた、いえ、世間に負けた」という古い歌があります。しかし主がおっしゃった「世に勝った」とは、世間に勝利したというわけではありません。ここでいう「世」とは、「この世のプリンス、サタン、悪魔と同じく、地獄を意味します」(真のキリスト教 116:3 他)。

新約聖書の中での地獄の戦いと、主の勝利は、明確にはわかりません。たとえば、荒野での四十日四十夜の断食の後の悪魔との三つの問答です。石をパンに変えよ、体を神殿の頂から投げて天使に救わせよ、悪魔を拝めば世のすべての国と栄華を与える、と主を試みます。これに対して主は、いずれも聖書の御言葉を用いてこれを退けます。「人はパンだけではなく、神の口から出る一つ一つのみことばによって生きる」「神である主を試みてはならない」「神である主を拝み、主にだけ仕えよ」(マタイ 4:1~10)。

しかし、天界の教えにはこうあります。「主の地獄との戦いは、議論や法廷の当事者間における、言葉の上での戦いではありません。このような戦いは、効果がありません」(真のキリスト教 124[2])

確かに、口先だけそしてロジックだけで、あの悪魔や地獄を抑えつけることができるとは思えません。

主が戦われたときの模様は、新約聖書では明らかにされてはいませんが、天界からの教えに「非常に不完全ではあるが」という前提つきで、描かれています。

それは、「あらゆる武器で完全武装し、狡猾で熟練した将軍や参謀のもとに集められた全世界のあらゆる国家からなる大軍に対して一人立ち向かうようなもの」(真のキリスト教 123[3])でした。

あなたは一人てただ広い平野にたたずんでいます。そのあなたを、核兵器や毒ガス、戦車、ミサイル、機関銃などあらゆる武器で完全武装し、孫子やナポレオンなどの古の軍事的天才が、コンピューターや現代のIT技術を駆使して、2千万人もの全世界の連合軍(2012年国際戦力研究所、現役のみ)が囲みます。海には原子力潜水艦、空母、空には攻撃ヘリや無人攻撃機が取り囲みます。いかに知恵を巡らし、あがこうとも敵うわけがありません。論戦に持ち込もうと口を開く前に、跡形もなくなるまで集中砲火を浴びてしまいます。

しかし、主と地獄との戦いは言葉ではなく、「霊的な戦いであり、主のまさに本質的なものである神的善から発した神的真理によるものであり、これが視界を通して流入するならば、地獄で堪えることのできるものは全くないです。地獄の霊がそれに気づくと、たちまち逃げ去り、深みや洞窟に這いずり込みます。」(真のキリスト教 124[2])

全世界の完全武装した軍隊は、蜘蛛の子を散らすように、たちまち逃げ惑います。

新約聖書にも、主がおいでになるのを悪霊は「遠くから見つけ」、「駆け寄って来てイエスを拝し、・・・どうか・・・苦しめないで下さい」と主に懇願します。レギオン、大勢と名乗る悪霊たちは、豚の中に入るよう主に懇願し、イエスが許されると、「二千匹ほどの豚の群れが、険しいがけを駆け下り、湖へなだれおちて、湖におぼれてしまった」(マルコ 5:6-13)とあります。豚とは浅ましい食欲に生きていたものであり、地獄に突き進みます(黙示録解説 659:6)。新約聖書の至る部分で、主は苦しむ人達から悪霊を追い出されます。呪文を唱えたり、議論によって打ち負かしたりされたわけではありません。ただ、「お命じになった」だけです。言葉のやりとりや議論ではなく、神的善から発した神的真理を用いて主が戦われたことを表します。私たち自身に、そんな力がかけらもあるわけではありません。先の全世界の連合軍にとことん追い込まれ滅ぼされてしまうのが落ちです。あなたが独りの力でどんなに力を尽くして戦おうとしても、防波堤も何も遮るものがない海岸で、高さ何十メートルもの大津波に身一つで立ち向かうようなものです。

戦いにおける主の御力の凄まじさが明確に描かれているのが「最後の審判」の時です。『最後の審判』の内的意味は、その教会の最後の時期が意味され、天と地が過ぎ去ることによって、内的そして外的な礼拝についての教会に、仁愛が存在しなくなり、教会であることが終わる、ということの意味します(天界の秘義 1850)。

この地球には最後の審判が過去三度ありました(「最後の審判」46)。最初はノアの洪水の時、そして二千年前の主の地上への降誕、そして 250 年ほど前の再臨の時です。最後の審判の前には、「視察」が必ず行われます。世間に善人と悪人が混ざり合っているように、霊界にも善霊と悪霊が混在しています。「視察」の日本語上の意味は、「現地・現場に行き、その実際のような様子を見極めること」ですが、この視察は、人々の性格を点検し、邪な者から善人を「分離」するために行われます(「最後の審判」61)。創世記19章でソドムの町にふたりのみ使いが遣わされます。み使いはその町の悪人に囲まれますが、二人のみ使いを救おうとしたロトの一族をソドムの町から逃し、町に残った悪人を硫黄の火で滅ぼしました。この視察によって、悪人から善人が分離されて、審判が行われます(天界の秘義 2318 他)。

この視察の後、最後の審判が行われます。最後の審判は、個々人の死後すぐにもありますが、これは霊界での話です。250 年前の霊界で旧教会へなされた審判の一部です。

神の力を騙って、金と引き替えに人を赦し、信仰の真理を自分の権威のために用いた教会に対する霊界における審判です。まず審判の始まりを告げる大地震があります。そして、火山が噴火します。東から凄まじい風が来て、悪霊から不正な蓄財などはぎ取ります。火事が起こり、煙が充満し、厚い粉じんにつつまれます。あるいは棲み着いている山が丸ごと崩壊します(「最後の審判」61)。現代に兵力 2 千万人の核武装した連合軍がいたとしても、この天地をひっくりかえすような天変地異には、這々の体でシェルターに逃げ込むしかありません。神的善から発する神的真理の力は、このように想像を絶する凄まじい力を発揮します。どんな人間の力も超える、神的なみ業です。最後の審判は、キリスト教徒にだけではなく、イスラム教徒、その他の宗教のもとにも、引き続き起こります(「最後の審判」9 参照)。

これら主の御業は、悪霊を懲らしめるためだけに為されたのではなく、人類と天使を救うために行われたもので、「贖い」と呼ばれます。

「贖いそのものは、地獄を服従させ、天界を秩序づけ、それによって、新しい霊的教会を備えることでした。」(真のキリスト教 114) 「贖うとは、囚われ人や縛られた者を破滅から解放すること、彼らを永遠の死から救い出すこと、地獄から奪うこと、悪魔の手から奪い去ることを意味します。主は地獄に対する支配を得て、新しい天界を樹立することで、これをなさいました」(真のキリスト教 118)。地獄を服従させることなしには、人も天使も救われることはありません、なぜなら霊界と自然界は、人の心の奥底を通じて結ばれているためです。(同上)そして贖いのすべては、ことごとく主お一人のみわざであり(同 123)、主が「贖い主」と呼ばれる理由です。

主が贖いのみ業をお一人でなされたことは、イザヤ書にも書かれています。

「わたしは見回したが、だれも助ける者はなく、いぶかったが、だれもささえる者はいなかった。そこで、わたしの腕で救いをもたらし、わたしの憤りを、わたしのささえとした。わたしは、怒って国々の民を踏みつけ、憤って彼らを踏みつぶし、彼らの血のしたたりを地に流した。」(63:5,6)

天使でさえ、主を助けません。主が自らのお力で一人で地獄に勝利されたのです。

主がお一人で戦われるのなら、人は戦わなくてよいのでしょうか？主のみが戦い、力のない私たちは、かなうはずのない地獄と事を構えず、主の力をあてにしていればよいのでしょうか？

主の力を信じることは大切ですが、主の力だけを待つことは、「信仰だけ」という旧教会と似たような過ちを犯すこととなります。自分の力や知恵に頼りすぎることは危険ですが、「主のみ業」を待つだけでも同じように危険です。主のみ心を求めて、自ら行動し、善いことはすべて主に帰し、悪いことは自分に帰すことが、新教会に求められた姿です。なぜなら、信仰だけでは、妄想や空想と同じように、行動がなければ、それはすぐに消えてしまうからです。「新教会の信仰の本質は、神である主、救い主イエスへの確信と、イエスが善い生活を送り、正しいことを信じる者を救われるという確信です」(真キリ 344)。信仰とはこの行動を促す、この確信です。行動を促さないものであれば、紙の上に書いた知識にしかすぎません。行動を促さなければ、信仰とはいえません。

しかし、信仰だけでは冬の冷たい光と同じで、人は凍えきってしまいます。暖かさがなければ人は寄ってきません。今までの日本の新教会に「真理だけ」が多く、人が居着きにくいと同じです。やはり、暖かく優しい心、隣人に善かれと思う心である、仁愛が必要です。なぜなら「主は、人の内にある仁愛と信仰である」(真キリ 368)からです。信仰が主から来た人の持つ確信であるとすれば、主からくる仁愛、優しい心がなければ、主は人の内に存在されません。強制や思い込みだけでは信仰として欠けるように、信仰の中に温かい優しい心がなければ、生命を欠きます。

ただ優しい心も、自分に損だとわかればたちまち消えてしまうことがあるように、優しい心を抱いても何もしなければ、そのうち消えてゆく可能性があります。信仰も紙に書かれた知識のままです。これでは信仰も仁愛もたちまち頭の中で消えてゆき、主は人と結びつくことができません。人は主と結びつかなければ、地獄に決して勝つことはできません。

あなたの内に主が存在するためには、信仰と愛が同時に存在しなければなりません。この信仰と仁愛が同時に存在するための条件が、善い行い、善行です。

「善い行いのなかにこそ、仁愛と信仰が同時に存在する」(真キリ 373)からです。「善い生活を送り、正しいことを

信じる者を救われるという確信」と、隣人に対する優しい思いを、善行として行動として表すことによって、はじめてあなたと主は結びつき、あなたを通して、主はその力を発揮されます。そのため、たとえ自分では敵わないという状態であっても主は、「勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝った」(ヨハ 16:33)と、勇敢に行動することを求められておられます。地獄の力におびえ、主の力を漠然と待っているだけでは、何の力も発揮できません。あなたが、「勇敢に」行動することによって、初めて主はあなたを通して働かれ、あなたは主によって勝利します。地獄の力に勝利します。地獄と派手に戦争するわけではありません。地獄から来る密やかで、ずるがしこく心に吹き込まれる悪を、敢然と断ちきることが可能となります。これは、悪だと知って、勇敢に地獄を遮断することができます。

もちろん、「勇敢」な行動の前に、主イエスへの確信と、隣人への優しい思いが欠けてはなりません。見せかけだけの勇敢さ、善行であってはなりません。自分の内側に、本物の信仰と仁愛が存在するかどうか、ここで教訓となるのが、第三の審判の対象です。

「最初の天界は、最後の審判の対象となる者全員の集まりです。地獄と天界にいる者、そして霊の世界にいる者、または現在生きている者は対象ではありません。対象となるのは、偽天界の類いのようなものを構成している者で、おおよそは山や岩の上にあります。主が左に置かれた山羊によって意味されます(マタイ 25:32, 33)。…彼らは、生前表向きは敬けんな生活を送っていましたが中身は違っていました。法や道德によって高潔で正直でしたが、神の法によってではありません。外的でそして自然的な人々ですが、内的で霊的な人達ではありません。…彼らは神を恐れず、人を恐れ善を行います」(「最後の審判」69)。

この教えを胸に手を当てて考えてみましょう。自分が最後の審判の対象となるかどうか。何を恐れて、悪を避け、善の生活を行っているか。審判は霊界だけではなく、「個別には人は死後すぐ最後の審判を迎える」(天界の秘義 1850 [5])からです。それはいつ来るか、誰も知りません。十年後かも、五十年後かも、そして一週間後かも、あるいは今晚かもしれません。肉体の死を恐れるよりも、霊的な死を恐れるべきです。人の眼を恐れて悪を避けるのは自然的な状態であり、これは霊界ではさほど評価されません。正しくは、神を恐れて悪を避けます。これが霊的教会である、新教会の求める姿です。自分の深いレベルで、自分自身にこれを問います。あなた自身が、人の眼を恐れてではなく、天地の唯一の神である主を恐れて、悪を避けているか自分に問います。「視察」が行われる前に自ら自己を点検します。

自己点検の後には、自ら主に近づき、主に助けを求めます。なぜなら、「私たちすべては、自分の役割を果たし、神に近づいてゆかねばなりません。私たちが神に近づけば近づくほど神は私たちに入られます。それは神の役割です。…霊的試練は、神との結びつきに導きます。霊的試練の間、人は全く完全な孤独の中に残されるような状況になりますが、実際には私たちは一人ではありません。そのとき、神は最も深いレベルに、最大の親密さと共に存在しておられ、支えておられます」。(真のキリスト教 126)

新教会の信仰、主イエスへの確信を持って、隣人に優しい思いを抱き、それを勇敢に実行すること。こうすることで全能の主と結びつきが生まれます。そうすれば、あなたはどんな艱難に会おうとも恐れることはありません。主が共におられるからです。「あなたがたは、世にあっては艱難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。」アーメン

イザヤ 63:1-9

「エドムから来る者、ボツラから深紅の衣を着て来るこの者は、だれか。その着物には威光があり、大いなる力をもって進んで来るこの者は。」「正義を語り、救うに力強い者、それがわたした。」

「なぜ、あなたの着物は赤く、あなたの衣は酒ぶねを踏む者のようなのか。」

「わたしはひとりで酒ぶねを踏んだ。国々の民のうちに、わたしと事を共にする者はいなかった。わたしは怒って彼らを踏み、憤って彼らを踏みにじった。それで、彼らの血のしたたりが、わたしの衣にふりかかり、わたしの着物を、すっかり汚してしまった。

わたしの心のうちに復讐の日があり、わたしの贖いの年が来たからだ。

わたしは見回したが、だれも助ける者はなく、いぶかったが、だれもささえる者はいなかった。そこで、わたしの腕で救いをもたらし、わたしの憤りを、わたしのささえとした。

わたしは、怒って国々の民を踏みつけ、憤って彼らを踏みつぶし、彼らの血のしたたりを地に流した。」

私は、エホバの恵みと、エホバの奇しいみわざをほめ歌おう。エホバが私たちに報いてくださったすべての事について、そのあわれみと、豊かな恵みによって報いてくださったイスラエルの家への豊かないつくしみについて。

主は仰せられた。「まことに彼らはわたしの民、偽りのない子たちだ」と。こうして、主は彼らの救い主になられた。

彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救った。その愛とあわれみによって主は彼らを贖い、昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来られた。

ヨハネ 16:33

わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を持つためです。あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。

真のキリスト教 114 (アルカナ訳)

[I] あがないそのものは、地獄を征服し、天界をととのえ、それによって、新しい霊的教会を準備することであった。

[II] あがないがなかったら、人はだれも救われないし、天使も完全無欠な状態にとどまることができなかった。

[III] 主は、このようにして、人間だけでなく、天使たちも、あがなわれた。

[IV] あがないは、純粹に、神のみわざであった。

[V] あがないそのものは、神が人間として受肉されないかぎり、成立しなかった。

[VI] 十字架の苦難は、主が最高の預言者として耐えられた最後の試練であるとともに、主の人間性が栄化されるため、おん父の神性と一致合体されるための手段であったが、あがないではなかった。

[VII] 十字架の苦難があがない自身であったとする考えは、教会の土台をゆるがす誤りであった。それはまた、永遠のむかしから、神が三つの位格であるとする誤りといっしょになって、霊的なものは名残りをとどめないほどに、教会全体をゆがめてしまった。